



職人たち⑤

～板金～

若者が進めるよう道しるべに

と周辺のマッピングを同時に進める「SLAM技術」を利用した管理システムを九州大と共同開発した。従来の計測手法では1時間以上要していた作業が、撮影・測定から結果まで1-2分程度で

は、水・ガス・空気・電気などの用途別に設置するため、建物全体では相当な数になる。取り付け位置の精度は躯体工事後の設備工事に影響する。このため、コンクリート打設前は関係者立ち会い

AM技術を利し迅速に設備スリーブの取り付け位置を確認する。端部に新設計のメーカーを貼付し、コンピューターとカメラを組み合わせた装置を使い動画を撮る要領で全体を撮影・測定する。リ



家の端音(地中梁の両端)に設置されたSLAM技術を用いた室内実験の様子

ちょうどバブルが崩壊した時期で、就職先に悩んでいた時に思い出したのは美家の存在だった。

20歳で板金の仕事を本格的に始めたが、始めのうちは材料を運んだり、掃除をしたりと雑用ばかり。やりたいたい仕事ではないという気持ちが強かったという。

そんな小刀根さんが「板金の仕事は面白い」と思い始めたのは、5年ほどが過ぎ、初めて戸建て住宅の物件を任せられたころ。

単純に、屋根などが仕上がっていきの様子面白く、きれいにできればうれしかった。そして、住宅を施工する工務店から褒められると、なおさらうれしい。そうして30代半ばまで戸建て住宅の仕事をしてきたが、

子ども頃から父が営む板金製作所に入り、たが、板金ではなく食品関係に興味があり酪農大に進学。しかし、2年で中退。

小刀根製作所専務 小刀根 雅紀さん

仕事の面白さ伝えていきたい



折り鶴やバケツ、写真フレームなど銅板ではいろいろな物が作れる

「独自の仕事がしたい」という思いも湧き始めた。そこで始めたのが、銅板や鉄を使って作ったテーブルやプレートなどの雑貨作り。小刀根さんの作品は、人づてに評判が広がり、今では金道から注文を受けるまでになった。

銅板で作った「折り鶴」

「20年ほど前からほかのたいに作っていた」と話す。が、それでも自分の中で「壁」と思えた作品は10-20羽ほど。ちょっとしたすれや銅板の膨らみ方、曲がり方など、心から納得する作品に仕上げることがほぼ不可能だった。

折り鶴は、小刀根さんが指導している札幌板金高等職業訓練校でも訓練生に作らせている。通常の授業よりも熱心に取り組む訓練生もいるという。

しかし、小刀根さんは嘆く。「訓練生にプラモデルを作ったことがあるかど聞くと、ないという訓練生が増えてきた。いわばものづくりの原点でもある幼少期の遊びが、職人への道を遠ざけているような感覚にも陥る。

一方、小刀根さんのように雑貨を作りたいと話す訓練生もおり、小刀根さん自身、その時代の変化に驚いている。それでもやはり板金の仕事のベースになるのは訓練校の存在だという。「訓練校で教わったことが全て」

銅板などの材料に線を引く、それを正確に切る、曲げるなどの作業を行うのは大変難しく、「最終的には自分の目」がポイントになるという。また、はさみやツカミ、ハンマーといった道具も使いこなせる人が減っていることに危機感を感じている。

「板金の魅力は作品がきれいにできたり、客に喜んでもらえたりすること。板金の仕事は他の専門職の人ができる仕事ではなく、自分たちしかできない仕事。そうした板金の仕事の面白さを伝えたい」

北海道の板金職人は、全国競技大会に出場してもレベルが高く、職人としての質も意識も高いと感じている。その若い人たちの進むべき「ルール」となるために今の自分があるという。



タカシヨ材パネル「ボード」に木調や壁をイメに近い質感をえた。今一バーリエー豊かな空間していく。

エバーは高剛性のネルを耐候った建材パ運べる軽さ